

研 究

フリースタイル出産での出産体験自己評価

浜松赤十字病院 看護部

上島久美子, 大石皇子, 新保綾子

要 旨

フリースタイル出産を取り入れ始めて、助産師としては産婦との一体感がある、分娩時の胎児心音低下が少ない等のごたえを感じている。しかし、産婦自身はどう感じているか調査できていない。そこで本研究は、フリースタイル出産をした母親の満足度を明らかにする事、満足度に影響を与える因子を知る事を目的として取り組んだ。

フリースタイル出産を初めて経験した産婦10名にアンケート調査を行い、自己の出産について常盤らの「出産体験自己評価尺度」を用いて満足度を主観的に評価して頂いた。その結果、他院の先行研究（分娩台に固定された分娩方法）の調査結果と比較すると、当院の方が出産体験の自己評価が高かった。理由として、①分娩体位や呼吸法等の産婦の希望が尊重でき、自由度が高い事、②助産師介助の増加に伴い安心感が得られる事、③これらに伴う疼痛の軽減、が考えられた。

初経別では、比較できる経験のある経産婦の方が自己評価は高い傾向にあった。フリースタイル出産は、従来の出産法と比較して、より高い満足度が得られる傾向がある事が分かった。

Key words

フリースタイル出産, 出産体験自己評価

I. 緒 言

フリースタイル出産は、仰臥位に固定されないお産のスタイルであり、イギリスのアクティブバース（自分の納得いくお産を目指す）に由来している。日本では1990年頃より、「出産の場所イコール分娩台」という医療側にとって都合のよいお産から、産む側に主体をおき、産婦の希望する環境づくりを目指す、フリースタイル出産への取り組みが活発になっていった。また、フリースタイル出産が分娩進行に及ぼす影響として、分娩時出血量の減少、会陰切開の減少、会陰裂傷率・急速逸率の低下といった分娩合併症低下の報告が多くの施設から発表されている¹⁾。

当院においても、2003年よりスタッフ教育を開始し、2004年から実際にフリースタイル出産を取り入れ始めた。現在約50例である。助産師の立場としては、フリースタイルを取り入れたことで、分娩時の見心音が低下しにくい、産婦との一体感

があるというようなごたえを感じられる。しかし、産婦自身はどう感じているのかは、調査できていない。そこで本研究では、常盤らにより開発された自己評価尺度を使用し、フリースタイル出産を体験した母親が、自己の出産の満足度をどのように評価するのか、満足度に影響を与える因子を知る事を目的とした。

〔用語の定義〕

フリースタイル出産：仰臥位に固定されないお産のスタイル。当院では産婦の希望で、分娩台、ベッド上、畳の部屋の布団の上、と場所を選択する。

出産体験：分娩開始から見娩出後2時間までの経過の中で、産婦の情緒を伴った体験。

自己評価：自己の価値と能力について、自分自身についての感情。

II. 対象・方法

1. 研究期間：平成16年11月1日～12月1日
2. 対象：研究期間中，当病棟でフリースタイル出産し，本研究に同意が得られた褥婦10名
3. データ収集方法
 - 1) 研究目的を説明し，同意を得た上で，無記名自己記入の質問紙調査を実施した．研究委員が配布，病棟スタッフが回収した．
 - 2) 調査内容
 - a. 常盤ら²⁾の「出産体験自己評価尺度」35項目（5段階の尺度法）で，4つのカテゴリーに分類し，統計を行った．
 - b. 研究者独自で作成した21項目（選択と自由記載）①対象の背景について．②妊娠中の分娩への希望，イメージ，フリースタイルへの希望の有無．③妊娠中の分娩への準備．④分娩の実際，妊娠中の希望がかなったか等．
 - 3) 分析方法：SPSS12.0 J for windows を使用し，分析を行った．

III. 結 果

調査用紙回収率は100%（10名）であり有効回答率は100%であった．

1. 対象の背景

年齢は24～34歳，平均年齢は29.6歳であった．そのうち初産婦が4名，経産婦が6名であった．

分娩所要時間の平均は，第Ⅰ期は14時間33分，第Ⅱ期は54.1分，第Ⅲ期6.5分であった．

出血量（羊水含む）の平均は417.4g，アプガースコア1分後の平均は9.0，5分後は9.9であった．会陰裂傷率はⅠ度40%（4名）で，そのうち2名は縫合施行した．Ⅱ度は60%（6名）で，全員が縫合した．

分娩スタイルは，仰臥位10%（1名），側臥位90%（9名），分娩場所は分娩台が10%（1名），ベッドが80%（8名），畳の上が10%（1名）であった．

2. アンケートの結果

アンケート（a）の結果

〔Ⅰ. 自分なりにうまくできた のカテゴリーについて（図1）〕

リラックスできた，の項目には「そうでない」が10%（1名），「そうである」が70%（7名），「とてもそうである」10%（1名）「どちらとも言えない」10%（1名）であった．

お産の痛みを広い心で受け止めた，の項目は「まったくそうでない」10%（1名），「どちらとも言えない」10%（1名），「そうである」80%

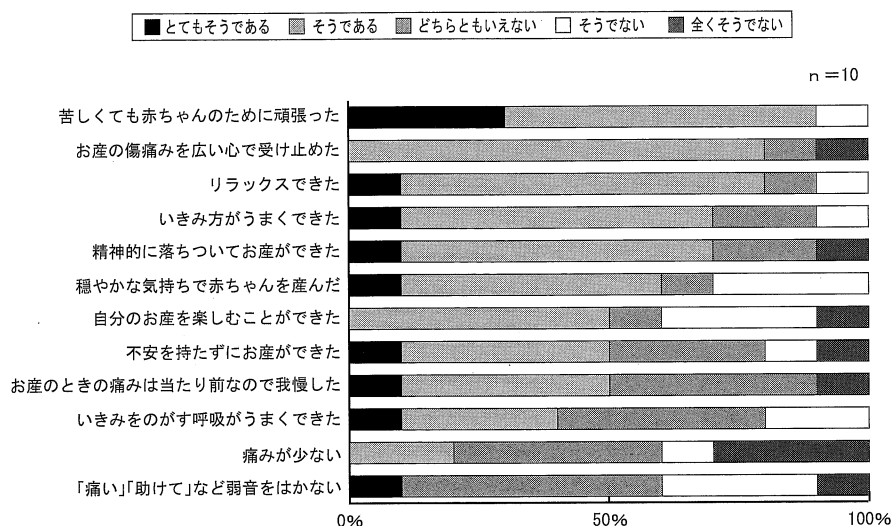


図1 出産体験自己評価尺度(自分なりにうまくできた)

(8名)であった。痛みが少ない、の項目は「まったくそうでない」30% (3名), 「そうでない」10% (1名), 「どちらとも言えない」40% (4名), 「そうである」20% (2名) だった。

〔Ⅱ. 順調で母子ともに健康 のカテゴリーについて (図2)〕

楽なお産ができた、の項目では「まったくそうでない」は10% (1名), 「どちらとも言えない」10% (1名), 「そうである」70% (7名), 「とてもそうである」10% (1名) であった。自分の思い通りのお産ができた、の項目では「まったくそうでない」10% (1名), 「そうである」50% (5名), 「とてもそうである」40% (4名) であった。

自分の力で産むことができた、の項目では「どちらとも言えない」10% (1名), 「そうである」40% (4名), 「とてもそうである」50% (5名) であった。

〔Ⅲ. 頼りになる医療スタッフの存在 のカテゴリーについて (図3)〕

すべて助産師にお任せできた、の項目では「そうである」30% (3名), 「とてもそうである」70% (7名) だった。自分の楽な姿勢や好きな呼吸法を主張できた、の項目では「そうである」40% (4名), 「とてもそうである」60% (6名) だった。自分のお産の経過を教えてもらった、の項目では「どちらとも言えない」10% (1名),

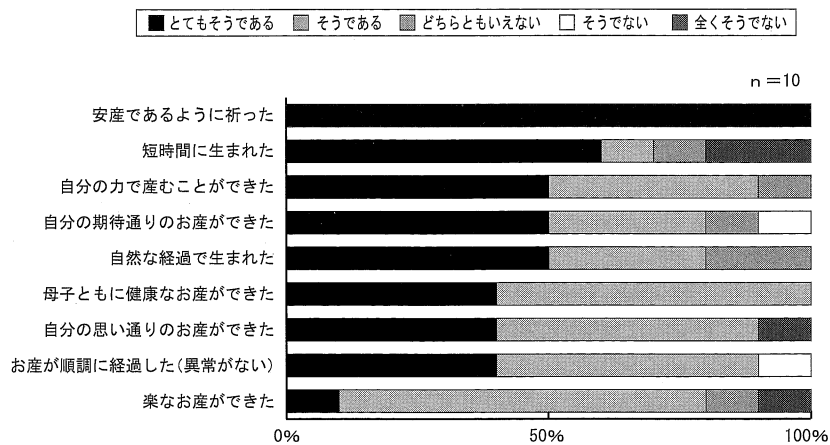


図2 出産体験自己評価尺度(順調で母子ともに健康)

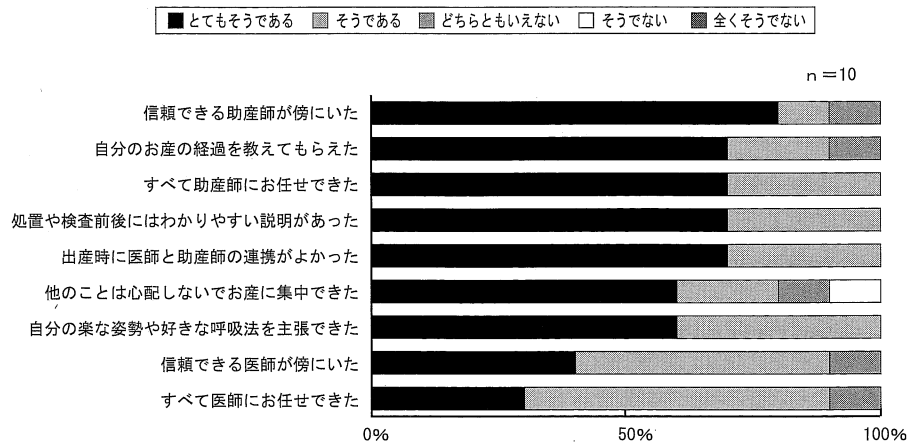


図3 出産体験自己評価尺度(頼りになる医療スタッフの存在)

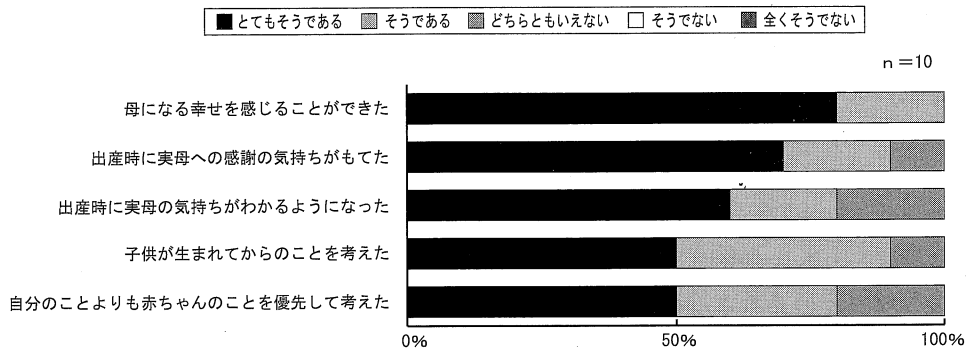


図4 出産体験自己評価尺度(母親としての自覚)

「そうである」20% (2名), 「とてもそうである」70% (7名) だった。

〔Ⅳ. 母親となる自覚 のカテゴリーについて (図4)〕

母親になる幸せを感じることができた, の項目では「そうである」20% (2名), 「とてもそうである」80% (8名) であった。

3. 出産体験評価尺度の合計点の平均は, 141.9であった。カテゴリー別に見ると「自分なりにうまくできた」は40.4, 「順調で母子ともに健康」は38.2, 「頼りになるスタッフの存在」は40.8, 「母親としての自覚」は22.5であった (表1)。

表1 カテゴリー別の平均点

(n=10)

カテゴリー	合計点の平均
自分なりにうまくできた	40.4
順調で母子ともに健康	38.2
頼りになる医療スタッフの存在	40.8
母親としての自覚	22.5

4. 出産体験評価尺度とアンケート (b) との関連
初産婦の合計点の平均が140に対し, 経産婦は150であった。

Ⅳ. 考 察

当院のフリースタイルによる出産体験自己評価尺度の合計点の平均は141.9であった。他院の分娩台での仰臥位分娩での調査結果である134.3と比較すると当院が高かった。施設が異なるため単純には比較できないが, フリースタイル分娩の方が, 出産体験の自己評価が高く満足度が得られる傾向にあることが分かった。

カテゴリー別に比較すると〔Ⅲ. 頼りになる医療スタッフの存在〕が先行研究の36.8に対して当院は40.2と特に高かった。フリースタイル出産は産婦の足を支えたり, 出産するまで腰をさすったりと自然に産婦と介助者の密接度が高まる。そのためより信頼関係が得られたのではないかと考えられる。河合ら³⁾も「フリースタイルはただ分娩体位が変化するというものではなく, 産む人と介助する人が上下関係から水平関係へと促すものである」と述べている。

自分の楽な姿勢や好きな呼吸法を主張できたという質問に全ての母親が「とてもそうである」, 「そうである」と答えている。

介助者が産婦の訴えに合わせて体位を自由に換えられ, 無理ないきみをかけずに分娩に臨めることが高い自己評価となったと考える。

〔Ⅱ. 順調で母子ともに健康〕は先行研究34.21に対し, 当院は38.2と高かった。

自分の力で産むことができた・自分の思い通りのお産ができたという質問に対し本研究の90%の

母親が「とてもそうである」「そうである」と答えている。側臥位分娩や座位分娩の場合、児の娩出の様子を母親自身が見て確認できたり、発露時児頭に触れたりできる為自分で産んだという実感が強いのではないだろうか。当院ではできるだけ薬品の使用や会陰切開を行わない事、バースプランを妊娠中に母親とともに立案し、出産に臨み、援助している事も理由として考えられる。

また、出産の感想として、「1人目の時には全く分からなかったが今回は破水・頭が出る・全身が出る・へその緒を切る・胎盤が出るといった出産のフルコースをすっかり味わえた」と答えた母親もいた。

〔I. 自分なりにうまくできた〕では、痛みが少ないという質問項目に対し「とてもそうである」「そうである」と答えた母親は60%であったが、お産の痛みを広い心で受け止めた・リラックスできたの項目では80%であった。介助者の腰部マッサージや体を支えるというタッチングや側においてリズムをとるといった援助が分娩中の不安や緊張を緩和し、痛みの反応を和らげるのではないだろうか。また、家族にもマッサージや体を支える援助に参加してもらうことが緊張緩和に大きく影響していると考えられる。

新道ら⁴⁾も、「重要他者や医療従事者の援助は、産婦へのストレス刺激を減少させるいっぽう、産婦のストレスへの対処行動を強めるのに役立つものである」と述べている。

家族がお産に参加しやすい環境をつくる事も重要だと考える。

アンケート (b) で自己評価に影響する因子を調査した。有意差のある項目はなかったが、初経別で比較すると経産婦のほうが合計点は高い傾向にあった。経産婦の場合は前回の分娩と比較して

分娩所要時間が短いことも考えられるが、分娩台に固定されたお産ではなく主体的に臨めるフリースタイルだったから満足度が高まったのではないだろうか。井上は⁵⁾、「第1子のお産を仰臥位や碎石位で数時間自由な姿勢をとれず陣痛を耐え忍んだ人たちにとって、自分の好きな姿勢をしてお産に臨めるということはたいへんうれしいことだ」と述べている。比較できる経験がある経産婦のほうがフリースタイルに対する満足度が高かったと考えられる。

今回の調査では、対象者が少なく個人のデータが結果に大きく影響していたが、今後も継続して調査していきたい。

V. 結 語

フリースタイル出産を経験した母親は出産体験自己評価が高く満足感が得られた。特に経産婦の自己評価が高い傾向にあった。

引用文献

- 1) 大野明子. 自由な体位での分娩進行. 周産期医学 2002; 32: 1665-1669.
- 2) 常盤洋子, 今関節子. 出産体験自己評価尺度の作成とその信頼性・妥当性の検討. 日本看護科学会誌 2000; 20: 1-9.
- 3) 河合蘭, 赤山美知代. 自由な分娩体位一寝ないお産の達人になる. 助産婦雑誌 1996; 50(8): 617.
- 4) 新道幸恵, 和田サヨ子. 母性の心理社会的側面と看護ケア. 東京: 医学書院; 1997. p.24.
- 5) 井上裕美. フリースタイル出産 (自由なお産). 治療 1999; 81: 2594-2597.